

SCOUTING 茨城

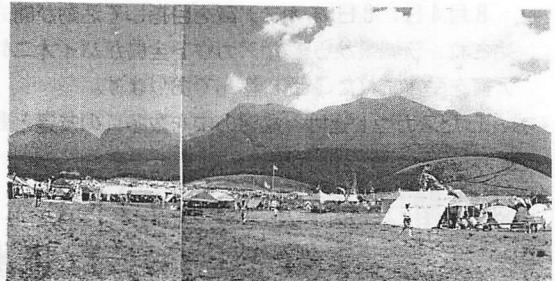
1995年・3月☆茨城県連盟広報委員会発行

第11回日本ジャンボリー特集号

「蒼き草原より未来へ」～地球にやさしいジャンボリー～



皇太子殿下のサイトご視察
(後ろはモンゴル国サイト) (埼玉県連広報撮影)



3SC本部地域
(後ろは久住山)

久住高原に燃える青春

大分県久住高原に日本の各地から、世界23ヶ国外から3万1千名のスカウトが一同に馳せ参じての第11回日本ジャンボリーが、灼熱の炎天下のなかで8月3日から開催された。

我が茨城県からは、スカウト352名指導者88名GHQ17名・GHQ奉仕隊30名・SHQ要員27名・SHQ奉仕隊20名・派遣団本部4名の538名が、バスで、航空機で、自家用車で炎天下の九州へと遠路をものともせず参加しました。

また、水戸から「自転車」で参加したシニアースカ

ウトもおりました。

この大会を顧みると、猛暑のなかでありながら茨城県から参加した500余名のスカウト・スタッフが何一つ大きなケガや事故も無く、元気に帰って来ることは何よりも喜ばしい事であります。

これは、ひとえに派遣隊指導者をはじめ、GHQ・SHQスタッフの方々の、長い間のご準備と奉仕の賜物と心より感謝申し上げます。

暑さの中での「蒼き草原」の会場で、スカウト達は選択プログラムに意欲的にチャレンジし、全員が「ハイオニア賞」を取得できたことも大きな成果でした。

日本ジャンボリーを終わって

茨城県連盟派遣団 団長 川又光男

第11回日本ジャンボリーが、8月3日から5日間大分県の蒼き久住高原で開催され、茨城県連盟からは11隊が参加しましたが、分散方式のため3個隊は、北海道連盟の1SCに配属されました。

残る8個隊は、埼玉・群馬・栃木とともに3SCを

形成して、久住山の眺望が一番良い場所でのキャンプで5日間を楽しみました。

スカウト達は、8月2日に茨城の各地から22時間掛け、8月3日午前9時に元気に会場に到着、早速キャンプサイトの設営が始まりました。

8月5日はキャンポリー大集会で、皇太子殿下のご台臨をいただき、橋本通産大臣、与謝野文部大臣、国会議員連盟の桜内名誉会長、原田会長、平松大分県知事など多くの来賓の出席のもと、広いアリーナは内外参加者3万名の人々で埋まりました。

皇太子殿下から戴いたお言葉は「遠く阿蘇を望み、久住山を背にする、この広大な高原で、皆さん、日々頑張ったスカウト精神と技能を十分発揮し、自然の尊さを学びつつ、人間と環境の考えを深められるよう期待し、日本各地と外国から参加したスカウトにとって交流を深め、友情のきずなを固く結ぶ機会となり、この大会が21世紀へ向けてより良い世界を築く第1歩となることを願います」との暖かいお言葉でした。

8月4日、6日はパイオニア賞を目指して活動が開始され、茨城県から参加したスカウト全員がパイオニア賞を受賞されたことを聞き喜んでおります。

参加したスカウト達は、猛暑の中を数多くの友達と

自然の中で遊び、学んで、素晴らしい体験をするとともに、スカウティングに参加する誇りと喜びを一層強固にしたことと思います。

今回のジャンボリーを、無事終了できたことは、3SCのスタッフの皆さんと、茨城県から参加奉仕された多くの指導者の皆さん、3SC細谷副野営長・津久井選択プログラム班長・八木施設・資材班長など多くの方々ほか、関係各位の長い間の綿密な計画と準備によるものと深く感謝申し上げます。

また、陰の力となった奉仕隊のシニアースカウト諸君の積極的な奉仕には頭の下がる思いです。

長いようで短かった5日間、環境を大切にしたこの日本ジャンボリーも、21世紀に向けて数々の思い出を残して、楽しく・事故のない・実のあるジャンボリーが出来たことを感謝しております。

(茨城県連盟副理事長)

素晴らしい哉、ボーイスカウト 3SC選択プログラム班

班 長 津久井 一 茂

記録的な猛暑の中、3SCの2300名を越えるスカウト達全員が、元気にパイオニア賞を獲得できることは、選択プログラム班を支えてくれたスタッフをはじめ、参加隊のリーダーはもとより各野営区の役員皆さんの一一致したスカウトを想う心構えと実践的努力の結果と感謝しております。選択プログラム班長の重責を担い、スカウト達にいかに楽しんでもらうか、そして心の中に今までに経験したことのない何かをつかんでもらう事が、私たちプログラム班の目標としました。

そして、このジャンボリーを通して、私たちスタッフも素晴らしい、そして貴重な体験をしました。これらのいくつかをエピソードをまじえてご紹介しましょう。

まず、私たち3SCのプログラムに挑戦するために、あの広大なフィールドを猛暑にも負けず延々一時間近くも歩いて訪ねてきてくれた山梨のスカウトのことです。プログラム展開第1日目は午後から『ダイクラフト』を行うことになっていました。その日の午前11時頃、まだ準備中の時にそのスカウトはやってきました。本来なら午後にもう一度出直すのが理屈です。クラフト担当のスタッフが私の所に相談に来ました。「急いで準備を完了するからすぐに開始したい。このスカウトに往復2時間の無駄を与えるわけにはいかない。

スカウト自身もプログラムを事前に研究してきており熱心である。私に否はありません。スカウトの立場に立って判断したスタッフに感謝の気持ちで一杯でした。

3SCでは韓国と米国ロスアンゼルスの外国スカウトが各隊に数名ずつ配属されていました。スカウト運動は世界共通とはいえ、異国での習慣のちがう活動には戸惑う事も多かったです。外国スカウトにもパイオニア賞を取ってもらうのが私たちの目標の一つでした。日が進むにつれ、弱音を吐く外国スカウトが目立ってきました。選択プログラム班では、所属隊長と相談しながらチャレンジの意欲を持ち続けるよう個別指導に当りました。チャレンジしやすいプログラムへの参加計画の練り直しを隊長とスカウトで考えてもらうことにしました。そして全員の外国スカウトが完遂できた時の隊長の喜びを目の当たりにした時にはとても充実感を味わいました。

また、大阪からのガールスカウト隊も3SCに配属されていました。この中に障害児スカウトがいました。甘やかすことなく、プログラムに挑戦してもらうにはどうしたらよいかがプログラム班長としての悩みでした。隊長は極めて淡々として対応されています。言葉も十分でないスカウトには、身体で表現してもらおうと考えました。チャレンジの態度を見ることにしました。仲間のガールスカウト達も声援を送っていました。そして必要な課題のすべてにチャレンジを終えたのです。

ジャンボリー最終日が近づくと『認定カード』を紛失する者が多くなります。それを拾ったスカウトから

届出がありました。隊長からの申請により既に最発行はしてありますが、当然のことながらチャレンジを認定するスタンプは押しようがありません。自分の足跡、努力の跡を記録に残すことが出来ないわけです。選択プログラム班のスタッフが拾得物のカードを隊長を通じて渡してあげたときのことです。そのスカウトは既にパイオニア賞は獲得していましたが、自分の認定カードが戻ってきたことに感激し、泣いて喜んだとの報告を受けました。

以上に述べてきたことは選択プログラム班を担当させていただけたからこそ出来た体験であり、本当に良かったと感謝しています。

スカウトの立場に立ったスカウティングは子供の心を動かす一番の方法と再認識しました。素晴らしいかな、ボイスカウト 素晴らしきかな スカウティング



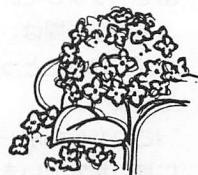
久住にはためく80本ののぼり

施設資材班 班 長 八 木 健 二

我が3SCは久住山をバックにGHQを隔てたメインストリート沿いに位置しており、期間中はスカウト達や車の往来が途切れることがなかった。

施設資材班の主な仕事は、ゲートの構築、野営資材・プロパンガスの配給であり、「地球にやさしく」を合言葉にシンプルかつ見栄えのするゲート造りをめざした。メインストリート沿いには各県連盟ごとののぼり80本を並べ、赤・緑・茶・紫色ののぼりは、さながら武者行列の感であった。半日を掛け13あるSCのゲートの写真を撮ってきて比べてみたら、我々のゲートとのぼりが一番良かった。これは一年間にわたる準備の成果であると班員全員が自負している。紅一点を含めた素晴らしい班員に恵まれ忙しい中にも和気あいあいと仕事をすることができた。

記録的な暑さの中で開催された久住でのジャンボリーは、私にとって熱い熱い思い出を残してくれた。



11N J 弥 栄

茨城第2隊 隊 長 小 林 勇 作

第11回日本ジャンボリー「蒼き草原より未来へ」のテーマのとおり、久住の高原は緑に覆われていた。

連日の猛暑でも最高気温37℃、一日の温度差20℃。明け方は寒さを感じる朝靄に包まれ、日中の暑さも高原の涼風が心地良かった。

北茨城1団・日立5団・日立6団・日立7団・常陸太田2団のスカウト指導者総勢40名編成の茨城2隊は、3SC7隊として蒼き草原に1夜にして出来た3万余人の村の仲間になり、そこには昼夜バスの長旅のかいが十二分にあった。

今、キャンプサイトの記念写真と、みんなで作った班旗や帰途にみんなでサインした隊旗を見ながら、広大な緑の大地でのキャンプ生活を思い起こして、感慨を新たにしている。

開会式、ジャンボリー大集会、閉会式の三大行事のほか様々なプログラムが準備されていた。

そのプログラムは事前にスカウト達に理解され、限られた時間内で何に挑戦するかも決まっていた。

パイオニア賞取得の最低条件をまずクリアするため初日に各班は場外プロに参加、選択プロも、班行動で消化すると同時に友情のサインを進め、埼玉の2個隊と隊交歓の後、スカウツォンでの隊長認定を併せて全て終了した。

パイオニア賞は最終日の朝礼で、全てのスカウトの

胸に輝き、指導者には記念メダル、特に自主性と行動力を評価された優秀スカウト3名には隊長賞が授与された。

ジャンボリーはボーイスカウトが主役であり、参加した者、そして県連や隊・班の代表旗手として晴れのステージに登壇出来た者、班長や次長の役務を与えられた者それぞれが皆努力したかは、スカウトそれぞれの人生の1頁に、彩やかさを異にして、思い出として焼き付けられ残ったことと思う。

そして、このジャンボリーで誰もが自主性と協調性と想像性とを磨いて、一段と大きく成長したはずであり、その全てが自分自身の健康の上にあったことも、実感できたであろう。

しかし、忘れてならないことが有る。

主役のボーイスカウトは、隊装備の荷造りや運搬をサイト撤収時に手伝いはしたが、それだけではないということだ。食堂テントをロープで固定したり、ガスの調理は君たちの誰もやっていない。

洗濯物干し場も誰が作ってくれたか知るまい。

主役が活躍するには、必ず裏方の陰の力が必要なことを知り、感謝の心を忘れないで欲しい。

そして又、「蒼き草原」で体験した貴重な数々は、自分だけのものにせず、原隊に戻って多くのスカウトに伝えて欲しい。

小事はいろいろ有りながらも、全員が元気に帰着できたことが隊長として何よりも喜ばしい限りである。……最後に、隊の参加にご支援頂いた各団及び地区、並びにご指導を賜わった県連の各位、また参加ご子息を暖かく見守って下さった父母の方々に厚くお礼申し上げます。

(第1地区第2隊日本ジャンボリー感想文より)

ジャンボリーの思い出

派遣隊 2隊 日立5団 塩野高宏

8月2日、午前6時40分に家を出て、多賀ねこうち公園へ向かいました。この日を楽しみにしていたのに、向こうに行っての生活に体がもつか少し不安でした。

バスの時間があつという間に過ぎた感じで久住高原に着き、テントを立て、開会式、夕食の準備から班長会議と久住高原での1日が過ぎた。

翌日の場外プログラムでは、岡城の城跡に行き、瓦らしい石を見つけました。その日はとても暑く、頭もくらくらになりました。バスの中に入り、帰る途中眠

る人が多くみられ、つかれていたのでしょう。

午後の選択プログラムでは、NEWエネルギーとチャレンジバレーに行きました。初めのNEWエネルギーは、エネルギー保全の重要性を理解してもらうために行われたようでした。思っていたより人が混んでいて、30分近く並んでいました。ようやく順番がまわりましたが、暑さがひどかったため、ボーッとしてしまいそうでした。まず初めにビデオを見て電気の大切さを知り、地球の状況を見せてもらい、本当の地球の状況が危ないことを知りました。何故ここまで地球を危険にしてしまったかと不思議に思いました。

実際にソーラー電池を使い、今度は本物のソーラーカーや電気自動車、水素自動車を見せてもらいました。あまりにも混んでいて、待っていたので1つしかできずにテントに帰って来ました。

次の日は、チャレンジバレーに行きました。アスレチックのようなもので、掛けを登ったり降りたり、丸太の上を歩いたりして、帰り道は川で石の上を歩いて行きました。

この日も1つしかできませんでしたが、NEWエネルギーはAコース、チャレンジバレーはDコースだったので、BコースとCコースは行かなくてもバイオニア賞がとれることになります。他の班は、次の日もプログラムに参加していましたが、自分の班は参加しませんでした。その間に僕達は、他の団の人や外国から来た人からサインをもらっていました。大阪からきた人にサインをもらいましたが、とても楽しい人でした。大阪の人はゆかいなのかなと思いました。

ようやく13人のサインをもらいましたが、みんなはまだ終わらないようなので20位のサインをもらいました。

サイトにはいくつかシャワーがあり、先輩といっしょにシャワーを浴びに行き、帰る途中皇太子殿下が通るというので道をあけました。車に殿下が乗っていらっしゃるのが見えたので、手を振ると、振り返してくれました。とてもいい思い出でした。きっと一生に残る思い出でしょう。

8月2日からもう何日たったかなと思った日に、家に電話を入れました。みんな元気そうでした。両親も心配していたようで、ほっとした様子で僕も安心しました。父には、8日に帰るので車の迎えをたのみ、電話を切りました。

あの1週間は、他の人にはちっぽけだと思うでしょうが、自分にとっては一生忘れられない想い出になるでしょう。

これからもボーイスカウトとして、がんばって活動に取り組んでいきたいと思います。

あの暑（熱）い日々

派遣第3隊 吉川 勲

思い出の中の11N Jはとにかく暑（熱）い。あの8月の太陽は陰る事を知らず暑く、私達第3隊（16隊）もリーダー・スカウトともに熱かった。とにかく隊長以下ジャンボリーに初めて参加する者がほとんどであったため、発隊してからというもの数回の訓練のたびに諸先輩から戴いた助言・協力はありがたいものだった。そのお陰で編成隊であるという不安は徐々にパイオニア賞獲得への意欲へと変わった。スカウトの名誉を高く掲げ、派遣隊はいきおい熱くなっていた。

朝のサイトは太陽との競争である。ひんやりどころか「うう、寒い」を連発しながら目覚め、しっかりと着込んでぞもぞ動き始める。それが朝食時ともなると、もう太陽エネルギーが全開で降り注ぎ始め、体から汗が流れ出す。食事もそこそこに汗まみれになって急ぎTシャツ・半ズボンに着替えると、あまた暑い1日が始まるという実感が沸く。

長旅と暑さと寒さと睡眠不足のせいで、朝のスカウトは動きが鈍い。プログラムに出発する彼らをリーダーがほほ笑みながら激励する。「歌いながら行進しよう。」

『光の道』を歌う。「さん、はい」こんな光景が毎朝くりかえされた。四方に陣取った埼玉の各隊から冷ややかな驚きの視線を浴びながら、スカウトは誇らしげに胸を張って歌いながら出発した（と隊長は信じている）。

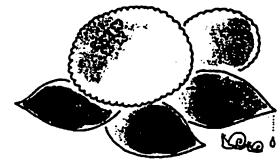
私達の隊のスカウトは昼食時によくサイトに戻ってきた。熱くなった頭を氷水で冷やすためと、できるだけ昼寝をするためである。氷だけはたっぷり用意しておいた。半分寝ぼけているスカウトも昼までには真っ赤な顔になり、埃と汗のせいで黒ずんでいる。スタンプをしっかりと頂いて、冷たい水を頭からかぶりすっきりする度に、パイオニア賞に近づく。しかし、昼寝ができない。日陰がないし、牧草地対策のドームテントの中は外より暑い。それでも体を横たえて日光浴する者あり、どさくさ紛れに毎日ちゃっかりシャワーを浴びに行く洒落者もあった。

慌てた一幕もある。撤営の日のこと、資材と個人装備だけを始めに片づける指示をしたはずだった。それがどういうわけか気がつくと、資材用マーキーのみならずテントまでもが片づいている。間が悪く、夜までは晴れという予報だったのに、あれほど陰りの無かつた空模様が怪しい。念のためにザックを残ったマーキーの下にまとめ始めたのと、稻妻が走るのとほとんど同時だった。そして雨がぽつぽつ、やがてざあざあ降り

始めた。この雨は本当に冷たかった。狭いマーキーの下に全員がひしめき合い、空を見上げては恨めしく、周囲の嘲りには悔しい思いで、雷の気まぐれが静まるのを待つ第3隊だった。幸いにして全員パイオニア賞を獲得できたものの、最後に来て悔いを残した。

意外なリーダーシップを見せたスカウト、不本意な日々を強いられたスカウト、寝不足で倒れたスカウト、毎日必死で活動したスカウトとジャンボリーならではの経験だったと思う。スカウト全員が必ずしも満足した11N Jとはならなかったかもしれない。隊長の力量不足と恥じ入っている。

派遣に当たりお世話になった方々には心から感謝している。そしてスカウト達があの経験をもとに成長し、さらに活発な活動に励むことを信じている。 弥栄



覚えているかい

茨城第4隊 隊長 富岡哲夫

覚えているかい

片道25時間のバスの旅を

君達は良く頑張ったね

サービスエリアではいつも正装だったね

スカウトの誇りを約束を守ったね

覚えているかい

熱く燃えた七日間を

友と共に参加したプログラムを

炎天下でも負けなかつたね

プログラムからの帰りにゴミを拾ってきたね

立派だったよ

覚えているかい

久住山から登る朝日を

満点の夜空にちりばめられた

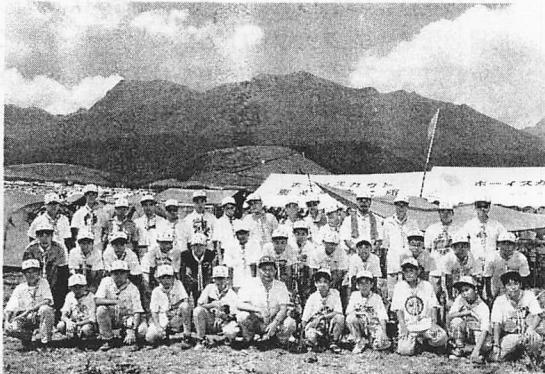
無数の星達を、降りしきる流れ星を

もう一度行きたいね

覚えているかい

31人プラス1人の

スカウトで参加したことを
写真でしか参加できなかった
友がいたことを
決して忘れはしない
大きな思い出 茨城第4隊を



日本ジャンボリーの思い出

派遣第5隊 富田 光一郎

僕が、今回のジャンボリーに参加して、まず驚いた事。それは、第一に、久住高原が、とても広かった事です。以前に、県キャンポリーに参加して、そこも広いと思いましたが、久住高原は、その何倍も広かったです。それに、とてもスカウトの人数が多かった事も驚きました。三万人以上の全国のスカウト達が一つの場所に集まつたのです。僕の住んでいる利根町は、人口二万人を少し超えたくらいですから、一つの町の人口を遥かに超えた人達が、久住高原に集まつたのです。

ジャンボリーの中で楽しかった事は、たくさんあって、書ききれないほどですが、その中でも楽しかったのは、班のみんなで、場外プログラムや各ゾーンへ行って、いろいろな活動をした事です。僕は、同じ隊の辻浦君と一緒に、結城の隊の人達と一つの班で活動しました。初めのころは、不安があったのですが、結城の隊の人達が、たいへん親切してくれたこともあって、すぐに慣れる事ができました。そのことが、とてもうれしかったです。その班で活動した中で、一番印象に残った事は、四日目の選択プログラムでした。その日参加したのは、「バイクバングル」と「チャレンジバー」です。その日は、朝早くから起きて、とても楽しみに待っていました。朝食後、すぐに出発し、Bゾーンに行き、各種目の混雑状況を確認し、「バイクバングル」に向かいました。バイクバングルは、みんなで

自転車に乗って行って、乗らない人は走るという、かなりきついものでしたが、僕は、みんなから遅れないように、走り続けて、がんばりました。バイクバングルをした後、Cゾーンの「チャレンジバー」に向かいました。チャレンジバーでは、いろいろな障害物をクリアしていくゲームだけど、時間の都合で、「モンキーブリッジ」は通らずに、下の岩場みたいな所を通って行きました。（そのことが少し残念でした。）岩場を通った後は、ロープを伝つていて谷を降りていったり、垂直な壁を登ったりして、とても楽しく、その時のことが、今でもはっきりと思い出されます。「バイクバングル」の後で、小さな川が流れていたので、そこで弁当を食べました。なぜか、その時の川の流れの美しさが、忘れられません。ジャンプすれば、一跳びで越えられそうな、小さな川でしたが、とても思い出に残っています。ご承知の通り、今年は、猛暑で、なおかつ水不足、まして、キャンプ場では、水は特に貴重なものです。僕達も、なるべく水を使わないように、食器にビニール袋を引いて、洗わなくていいようにして食べました。とにかく、水を大切にすることに気を配っていました。だから、その川の透明な水を見たとき、言葉では、言い表せない思いがありました。

絶対に取りたいと思っていた、パイオニア賞を取れたこと、スカウト通信員になって通信文を書いたこと、閉会式前の、激しい雷雨（今まで見たこともない凄いものでした。）閉会式フィナーレの花火、夜空の星のきれいだったこと、いろいろなことが、次々に、浮かんできます。

最後に、班の皆さん、お世話になったリーダーの方々、久住高原で出会った人達、本当に、良い思い出をありがとうございます。僕は、この夏のことを、一生忘れないと思います。

第12回日本ジャンボリーで、また、会いましょう。



スカウトの目と心から垣間見た世界

派遣第6隊 円城寺 守

スカウトの日常の考え方や生活に対してどのようなインパクトを与えることができるか、というのがこの大会に彼等を引率した側の最大関心事であった。ここでは、当隊のスカウトにとって特に印象が強かったもののあれこれから、この大会をふりかえって見る。

迫り来る九重連山、遠望せる阿蘇の峰々、満点の星、突然の雷雨など、久住高原の雄大な自然に素直な驚きを示したスカウトが多かった。「見渡す限りの草原に、心を同じくする者がかくも多勢、一箇所にまとまって・・・N Jの感激ここに極まれり」といった調子の賛辞があり、隊引率者としては、一応これをして成功と言わねばならない。

井の中のスカウトにとって、新しい友人ができたり、他の隊の活動との違いを目の当たりにするなど、毎日が新鮮で鮮烈な驚きであったようだ。とくに、外国人スカウトとの交流は、きわめて大きな影響を彼等に与えている。当隊に配属されたスカウトは韓国からの2名。日本語はおろか英語もほとんど理解できぬ、兄弟スカウトであった。英語が通じないので隊指導者もかなり戸惑つたものだが、スカウトはじきにうちとけ、助け合い、励まし合って、それなりに交流した。その印象と驚きの大きさは、事後の話振りやレポートなどから痛いほどに伝わってくる。

長時間のバス輸送は誠に不評であった。隊指導者は飽きさせないように、工夫し努力し、スカウトも一応それに答えてくれたが、それでも尚、「何のために…」という声に圧倒された。事前に隊指導者がもっと強硬に対応しなかったことが悔やまれる。次回にもまたN Jが行われるのであれば、是非再考を希望するところだ。

いまひとつは、炎天下に資材を運んだ距離についてである。テントサイトは谷を2つ越えた位置にあるにもかかわらず、荷物は遙か手前に降ろされ、荷車も占有されてしまっているという、事前の約束とは違う処置に面食らったのは隊指導者だけではない。終わってしまえば思い出しかないが、スカウトの目にも不公平感が残った。スカウトは大人の世界の有り様を実際に良くみているとびっくりさせられる。その意味では、隊指導者にとっても毎日が新発見の場であった。

大会のやり方そのものに対する批判も少なくない。開閉会式における運営のもたつきやまずさにスカウトの批評が返ってくる。とくに、来賓との対応、報道陣の扱い、会場設営の不備など、以前に経験した隊指導

者にとっては「またか」との諦観もあるが、濁り無き目にはこれも不信の対象となる。誇るべきスカウト人口の多さが見事に裏目に出てしまっている。

選択プログラムの受付の方法が当初示されていたものと違う、担当者の対応が冷たい、というクレームも多かった。隊指導者は現場にほとんど入っていないので、その矛先をどこに向けたらよいのか困惑することになる。

大会のテーマに同感して、「帰ってからも地球にやさしい生活をしたい」という気持ちを抱いたスカウトもいた。反面、会場における様々な問題点を指摘し、「いったいどこが地球にやさしかったのだ」と冷めた目で批判的なスカウトも多かった。今後の彼等なりの対処の仕方に期待したい。

とまれ、なによりもこのような意見や批判がスカウト自身の中から自発的に出たことがことのほか嬉しく、逆説的ではあるが、今大会最大の成果だったように思う。

N Jを語るとき、忘れられないのは、開催年に小学校6年生にあたるスカウトおよびその親の困惑のまなざしである。同じスカウティングをやりながら、なぜ彼等がN Jに無縁なのか、この不条理に対して未だに十分な説明をしてあげることができないのだ。

日本ジャンボリーの思い出

派遣第7隊 室井高城

『九州は台風の通り道で必ず台風が来るからそのつもりで行くように』と何度もスカウトに事前に説明していましたが、幸い予想は見事にはずれて前回の妙高高原と同様見事な快晴に恵まれました。恐ろしいのは台風ではなく実は猛暑でした。

5地区は7隊と8隊の合同隊とすることに地区で決めていましたので地区の参加スカウトは参加隊をバラバラにして隊と班を編成しました。この隊と班で準備や基崎での事前キャンプを行ってきました。

野営地区の分割の都合で3隊だけは関東の3SCではなく北海道の1SCに入らなければならず、7隊と8隊は前回のN J同様1SCを希望しました。野営や炊事の準備は2隊に一応分けてはいましたが、7隊と8隊が離れていると結構大変かなと思っていました。行ってみますと、1SCの本部からは小さな沢を二つ渡り、急いで歩いて約10分の所で久住山を真後ろにジャンボリー会場を一望できる小さな高台で7隊8隊はこの同じ小さな高台でした。水とトイレの場所は少し遠

く不便でしたが眺めのとても良い所でした。リーダー同士話し合いをし隊本部を7隊と8隊の真ん中に合同で建てることにしどとんど2隊合同に近い形で運営することにしました。合同ですのでリーダーを手分けして動け余裕がありました。炊事はすべてスカウトの食事はスカウトが班ごと炊事係を出して自分の班の2個のガスコンロで調理しました。最初は早い班と遅い班があり極端でしたが帰り近くになって調理は実に手際よくできる様になりました。ただ食事はレトルト品が多く育ち盛りのスカウトにとって量と質の点で物足りなかったようです。冷たい飲み物の飲みたいスカウトへの氷の配給も十分とは言えず売店でのコカコーラのピッグサイズが飛ぶように売れゴミ集積場が容器であふれていきました。売店がもう何か所かあれば良かったのではないかと思います。

暑いので千勝君と小原君が若干具合が悪くなりました。残念なのは傍島君が大会中風邪でほとんど寝たきりになってしまったことです。他は神郡君が帰り近く結膜炎になったことぐらいで幸いにも大きな怪我や病気は発生しませんでした。8隊の相澤隊長がスカウトを寝かせスカウトのお腹に触るとスカウトが直ぐ寝てしまうのは驚きでした。

二日目は選択プログラムに出発させるのが大変でした。コースによってはコースのリーダーの準備不足で手続きが良くわからずスカウトが必要のない書類を取り戻されてきたものもありました。一番時間がかかる久住山登山が一番早く帰ってきました。大会中特設スタジオからしているプログラムの案内があると聞いていましたがほとんどありませんでした。

アリーナ会場の場所が悪く場所によってはほとんど舞台が見えず音響も悪く音もかすかにしか聞こえなかつたのは残念でした。

隊の交歓会を愛知の隊と大阪の隊と2度行いました。大阪の隊の時はバツゲームの品が悪く、隊長として怒鳴ってしまいました。

大会期間中、ローバーとシニアには大変苦労をかけました。一言も文句を言わず黙々と働いてくれたことに感謝したいと思います。

日本ジャンボリーの思い出

派遣第8隊(茎崎1回) 本田恭崇

昨年の夏とは違って、猛暑の中の久住高原で行われた第11回日本ジャンボリーは隊で毎年行われている夏のキャンプとはスケールも違うし、プログラムもたく

さんあって、けっこう楽しかった。久住高原へは1日かけてバスで出発したのだった。着いたのは翌日で、9時ごろになった。荷物を運ぶだけで息切れしてしまって設営の時に立ちくらみしてふらふらしていて仕事が捲らなかった。

会場で選択プログラムとして、マレットゴルフ、バイオバンブルをやった。

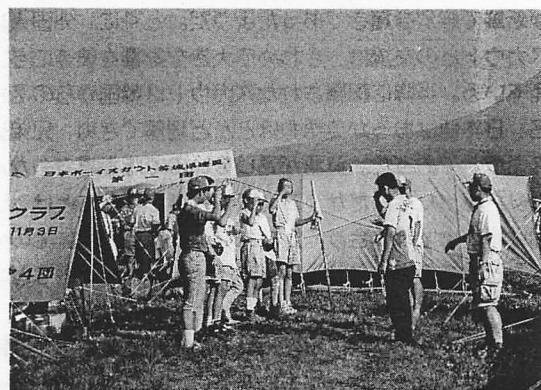
本当は、キックANDシュートをやる予定だったが、人数が多すぎてできなかった。

ジャンボリー大集会では皇太子殿下もいらっしゃつて、お顔を始めて拝見できてとても嬉しかった。閉会式ははっきり言ってすごかった。花火もたくさん上がって、ライトもそれと同じくらいのすばらしさでおもわず開いた口がふさがらないといった感じであった。

その日の夜に僕らはバスに乗った。

クーラーのきいているバスは疲れていた僕には、心が安らいだ場所で妙になつかしい気がした。

そして、友達もけっこうてきて、日本ジャンボリーに参加してよかったです。



日本ジャンボリーの思い出

派遣第9隊 日々野 善 行

とにかく暑かった。これが一番の思い出かなあ。初日の設営は、みんなと楽しく笑いながらテントを立てた。しかし、昼すぎには、気温もだんだん上昇して32度と聞いた時はとてもびっくりした。開会式では、旗手をやりました。旗手の集まつた場所から会場を見た時、スカウトがたくさんいた。だんだんジャンボリーに来たのだなと実感がわいてきました。次の日、チャレンジバーを行ったけど暑い中で2時間くらい待ちました。でも、お昼になったら、シニアの受付のお兄さんがこのあとは午後からだよ」と言われました。

せっかく長い時間待ったけどできませんでした。一緒に参加した友達が気分が悪くなってしまい、救護へ行きました。たくさんのスカウト達が暑さにバテて休んでいました。

パソコンやハンディキャップにも参加した。とても勉強になりました。もっとたくさん参加したかったのですが、パイオニア賞を取るために必要なプログラムに参加しなくてはならなかったので、ちょっぴり残念でした。ジャンボリー集会では、皇太子殿下がおいでになり、暑くて、ほこりのすごい中で、盛大に行われました。もっと近くで殿下を見てみたかったです。FM放送局に見学に行った時、美人のアナウンサーのお姉さんからステッカーをもらいました。いまもだい事に持っています。自由時間に売店に行ってお土産を貢おうと思ったのですが、ほしいおみやげが、ほとんどなくなっていたのでもっと早く買っておけばよかったです。いろいろなサブキャンプでたくさんの友達とサインの交換をしました。ガールスカウトの女の子達もいましたが、なんかはずかしくてサインがもらえませんでした。みんなは度きょうがあっていいなあと思いました。撤収の日にどしゃ降りの雨が降り、びしょびしょにぬれたけど、とてもきもちよかったです。竜巻で朽木のテントが吹きとばされたとき、自然の力を知りました。雨がやむまでタープの中でみんなと歌を歌ったり、話をしたり、これで終わりかと考えた時、ちょっぴり残念だなあとと思いました。閉会式は、夜に行われましたが、みんなの声で話しがよく聞こえませんでした。最後の打ち上げ花火は、素晴らしかったです。

何か熱いものがこみ上げてきたのは、僕だけだったでしょうか?

帰りのバスの中で僕は、今度シニアーになったら、奉仕に行こうと思いました。それは、シニナーのお兄さんから聞いた話しに、準備はとても大変だったけどみんな仲間だから楽しいよ。と言われたからです。ジャンボリー大会のみなさん、本当にお世話になりました。とても楽しくて、よい思い出ができました。ちょっぴりつらいこともあったけど……。



ジャンボリーに参加して

3SC 11隊 ウォター班 斎 藤 裕 真

11N J派遣隊のウォター班長として参加する積もりで、地区の事前準備訓練を受けていましたが、ちょうど学校の吹奏楽部の行事と重なってしまいました。私としてはジャンボリーにも参加したいし、吹奏楽のコンテストも私がいないと……、隊長に相談したところ、「班長は他の人に交代するので、途中からでもいいから参加したら」と言ってくれましたので、私も途中からだからパイオニア賞は取れなくても良いと思って参加しました。

出発の日、みんなを見送るため集合場所に行くと、楽しそうな顔で話をしていて、私もこのままバスに乗つてしまいたいくらいでした。

一人で九州までの旅行です。羽田から熊本まで飛行機で行き、バスでジャンボリー会場に向かいました。途中、よそのリーダーの方と一緒になり、本当に助かりました。

会場に到着すると、ジャンボリーカンパニーの最中でした。隊長に到着報告をして直ぐに集会に参加しました。それからが大変でした。班の仲間たちはすでに幾つかのプログラムを終了しています。これからが私のパイオニア賞への挑戦です。隊長からどのようにすれば最終日までに間に合うかを聞いて挑戦しました。班としてでなければ挑戦できないものもあり、班の仲間の協力がどうしても必要でした。最終日に仲間と一緒にパイオニア賞を隊長からいただいた時は、本当に感激しました。

11N Jに参加して、友情のありがたさを改めて実感しました。この思いをいつまでも大切にスカウト活動を続けたいと思っています。



鹿島アントラーズ ジーコ選手の引退式

鹿島アントラーズで活躍した「ジーコ選手」が引退することになり、11月6日引退式が鹿島スタジアムで開催され、我が第2地区のボイスカウト40名が奉仕された。

フジサンケイグループからの依頼により、日本連盟の許可のもとに、朝からのリハーサルの後、午後6時

から開催され竹本地区委員長始め、多くの指導者が奉仕されました。

リハーサルも1回のみで終わり、さすが訓練を受けたボイスカウトだと、主催者からお褒めの言葉をいただきました。

奉仕されたスカウト諸君ご苦労さまでした。



阪神大震災に義援金を募金

毎日のように被害の広まる兵庫県の地震も、「阪神大震災」となり、地震大国「日本」をさまざまと見せつけられました。

兵庫連盟は、スカクトの60%が神戸に在住しており、この地震で亡くなったスカウトも多くおられます。

日本連盟では、100張のテントを避難している皆様に救援とともに、兵庫や大阪連盟のローバースカウトや指導者が救援の奉仕をされております。

各団では、スカウトが自発的に義援金の募金を町々で実施しており、多くの被害者と仲間に募金しました。

編集後記

今回は第11回日本ジャンボリーの特集号として編集しました。

猛暑の中での「蒼き草原より未来へ」のテーマのもと、地球にやさしいジャンボリーが久住高原で開催され、天気にも恵まれて、あの久住山の眺望の良さは今も心に焼きついています。

事故も無く、楽しく、実のある素晴らしいジャンボリーでした。